

<研究ノート>

## 宇佐地域及び大分・宮崎県境の傘の出る盆踊り

坂本 要\*

### The Parasol Rites in Bon Dance No.2

Kaname SAKAMOTO \*

2017年の紀要に書いた「遠賀川流域の傘の出る盆踊り」につづく報告で盆の傘ブク（この地区では「傘鉾・かさほこ・かさほこ」という。）と盆踊りの音頭取り（歌い手）が差す傘の事例である。盆行事における傘の意味を考える。

調査地は

・大分県宇佐市のやっかん 駅館川上流の院内・あじむ 安心院地区と由布市湯布院町一傘鉾と音頭取りの傘  
・大分県佐伯市（旧米水津村）色利・宮野浦

—————傘鉾  
・大分県佐伯市かまえ 蒲江と宮崎県延岡市（旧北浦町）島野浦・熊野江 一音頭取りの傘  
いずれも現在、傘鉾もしくは音頭取りの傘を出しているところである。

院内・安心院・湯布院は2013年・2014年に別府大学段上達夫教授の調査に同行したもので段上氏がすでに論考を出している<sup>1)</sup>、調査報告は略述し全体の構成や他地区との比較に重点を置いた。

米水津は2002年に調査し2015年に再調査したものである<sup>2)</sup>。蒲江は2015年、島野浦・熊野江は2016年の調査である。

#### 1、大分県宇佐市院内・あじむ 安心院地区と由布市湯布院町

この地区は「庭入り」と称して8月13日・14日に初盆の家に傘鉾（「かさほこ」という。）を持ち運び、盆踊りをする。盆踊りの音頭取りは傘を差すところが多い。また「しかしか」という口上を述べる。「しかしか」は「然り然り」の略とされるが死者に対するお悔やみと盆のいわれを説くものである。

この行事は宇佐市院内町・安心院町に多く分布するが、周辺の由布院町・日出町・山香町にも点在する。段上氏の調査によると46ヶ所が確認され、37ヶ所で行われている。

傘鉾とは祇園祭りの傘と鉾の一体化したもので、幔幕を張り吊り下げ物が下がる。この地区は傘・提灯・花籠が合体したもの、別々に立てられるものなど、いくつかの類型に分けられる。段上氏はA花籠合体型傘鉾・B1傘鉾花籠分離型 [多段横棹式]・B2傘鉾花籠分離型 [多段輪式]・Cその他の形態 に分類している。

花籠は竹ひごの籠の先を伸ばし柳のように垂れ下げ紙の飾りを付ける。提灯は横棹を幾段も重ね何十個の提灯を付ける万灯型のもの

\* 筑波学院大学名誉教授、Tsukuba Gakuin University

で、輪わにして重ねるものが輪式である。折口信夫が注目した「髭籠ひげこ・だいがく」に似ている<sup>3)</sup>。傘鉦の傘は赤い傘や番傘であるが一番上に付ける。傘に幔幕のないところや傘がなく花籠だけのところがある。吊り下げ物はない。

### 1) 安心院町佐田

佐田は駅館川せつかんの支流佐田川にあり旧安心院町大字佐田で傘鉦の分布からすると一番北にあたる。佐田は旧来八つのグループに分かれて初盆の家の庭入りをしていたが、戦中一時中断し戦後復興したときは寄せ踊りとして村内一ヶ所で行った。現在8月13日佐田小学校の校庭で行っている。

傘鉦は5メートルほどあり赤い傘に南無阿弥陀仏と書いた幔幕をつけ、中に提灯を四張と何十本の竹ひごを柳状に下げ短冊を付ける。竹ひごの中にも提灯を下げ、竹ひごの上部を紫の布で覆う。これを櫓の脇にたて、庭入りが始まる。

庭入りは傘鉦を先頭に左回りに櫓を三回回り、新仏に向かって立ち、「花和讃」を唱える。和讃は先導者と列の人との掛け合いでと唱えられる。次に「しかしか」の口上になる。「東西おん東西 御静まり候えや 御静まり候」から始まる。語句は後述する。

「しかしか」が終わるとバンバ踊りといって男子だけで傘ブクのまわりを左回りに踊る。三つ拍子で「東西南北静まり給え。西も東も南も北も」の文句に「ヤレシヨヤレシヨソリャヨーイヨナ アリャセコリャセホイヨーイヨナ」の囃しが入る。音頭取りは唐傘を差して櫓に上がる。

ここで庭入りは終わり男女が踊る供養盆踊りになる。右回りである。曲は「マカセ」「レソ」「二つ拍子」「七つ拍子」「安心院小唄」「大津絵」「大阪兄妹心中」で「大阪兄妹心中」は口説きである。(写真1)

### 2) 院内町齊藤

齊藤の庭入りは8月13日に行う。初盆の家を一軒一軒回る「坪まわり」の庭入りである。傘鉦は最上部の傘の幔幕に「南無阿弥陀仏 齊藤若連中」と書かれている。以下七段の横竿に提灯が掛けられている。一段が六張から十張で三段目が一番長い横竿である。それとは別に花籠があり、傘ブクより低く籠から延びる竹ひごに細かい短冊状の紙が多く付けられて「しだれ柳」ともいう。迎える初盆の家でも金一封や手拭いを吊るした笹を軒先に立てる。庭入りは巻物読み・太鼓担ぎ・太鼓叩き・鈴・笛・踊り手の順である。まず全員で置台のまわりを御詠歌を唱えながら円を描いて入る。巻物読みが口上を述べる。口上は「東西南北静まり給え。西も東も南も北も」といってお悔やみを述べるもので、盆のいわれの部分はない。そのあと「鐘と撞木」という踊りをする。他所のバンバ踊りに相当する踊りで腰をかがめて膝のあたりで手拍子を打ち歌詞を全員で唱えながら踊る。途中から背を伸ばす踊りになり、拍子が変わり口説きに入る。口説きに入ると音頭取りが蛇の目傘を差して置台に上がる。口説きは「五調子」「マカセ」「レソウ」「ケダシ」などで「鐘と撞木」より早くなり囃し言葉が多く入る。

「鐘と撞木」の文句はかな書きで意味の通じないところがある。大門地区で「バンバ踊り」として同様の「カネと撞木」が歌われている。

歌詞「カネとしゅ木が流れて下る とかくその川ごしょの川 後生の願ひなれ お若いとても そよと吹き来る無常の風 後生願ふなら宇佐より中津 中津寺町ごしょ所 ここは一の谷敦盛様の お墓どころか いとおしや」(写真2・3)

### 3) 院内町下余しもあま

下余は8月13日に庭入りを行う。傘鉦は花籠と傘鉦が分離している。傘鉦は最上部に赤

い傘を立て七段の横棹に提灯が吊り下げられる。下にいくほど横棹が長くなる。上部一段目には下余と書かれた長提灯が2張、以下6張から12張の提灯が下げられる。花籠は竹ひごを垂らし細かい短冊状の切り紙を付ける。中に10個ほどの提灯を入れる。

庭入りは初盆の各家を回る。先頭の区長は切り紙を撒く。置台のまわりを笛を吹き、太鼓・繞鉢を鳴らしながら左回りに回る。御詠歌のあと「しかしか」が読み上げられる。それが終わるとバンパ踊りで「鐘と撞木」の歌詞を全員で唱えながら右回りで踊る。前ごみで団扇を持ち膝のあたりで拍子をとる。そのあと各種の口説きの盆踊りが続く。置台の音頭取りは番傘を差す。最後に御詠歌を歌い退場する。(写真4・5)

#### 4) 安心院町南香 (福貴野)

安心院町の深見川の最上流にあり、湯布院町に隣接する。南香は寒水・福貴野・枝郷からなり、現南香公民館(元福貴野分校)で8月14日四地区の寄せ踊りをする。運動場にその年に亡くなった人の祭壇を設け、僧侶の盆供養の後、庭入りをする。

傘鉾は4メートルほどの竹棹の上に番傘を差し、提灯を四張り付けただけのシンプルなものである。唐笠には南無阿弥陀仏の紙垂れが4枚付けられている。下部に初盆の家の盆提灯を下げる。傘には南香公民館と書いてある。この傘は供養のために立てるといい、庭入りからバンパ踊りの初めまで竹竿に立てられ、バンパ踊りから口説きに移ると櫓に立てられる。

花籠は最上部に日月の遠見と言って円形の飾りを置き、竹ひごは切紙が飾られ多くの提灯が下げられている。

庭入りは傘鉾・花籠に続き太鼓・鉦・笛・歌い手・踊り子が続き右回りに二周する。祭壇の前で「前念仏」が唱えられる。先導者が唱え続いて全員で唱える。図1に示したよう

に南無阿弥陀仏を引き延ばして唱える引声系の唱えでここでは「長念仏」と言っている。次に和讃「無勢の舟(無常の舟?)」を唱え、短く念仏を入れ「花園和讃」の唱え、「後念仏」がある。「後念仏」は始めの念仏同様引声系の念仏である。以上男子のみで行う。

その後「しかしか」が読み上げられる。悔みと盆の由来を説く。

次に「バンパ踊りが始まりました。ばばも出て見よ孫子を連れて」の文句とともにバンパ踊りが始まる。男女で大きく輪になり、団扇を持ち左右の手を簡単に振るう踊りである。その間傘鉾に差しある番傘が外され、音頭取りのいる櫓に立てられる。バンパ踊りに続いて「南北」という口説きが続く。南北は「南北静まり給え 西も東も南も北も」から始まり「宇佐の百段 百とは言えど 百はござらん やれ九十九段」というような様々な小唄が続く。口説きは「マカセ」他がある。(写真6)

#### 5) 湯布院町塚原

塚原は湯布院の市街地から奥の高原にあり、道は安心院町に続いている。8月13日初盆の各家を廻り供養踊りは夜小学校の校庭で行う。雨の場合庭入りは寺で行う。

傘鉾は一体型で番傘が花籠の上に乗る南無阿弥陀仏と書かれている白の幔幕が巡らされている。中に塚原と書かれた提灯が下がっている。その下に切紙で飾られた竹ひごが何十本と柳のように垂れている。中に赤・黄・紫・白・水色の布が垂れ、さらにその中に南無阿弥陀仏と書かれた提灯が下がる。

笛・太鼓・鉦で右回りに庭に入るが、太鼓は入口ですわって叩かれている。傘鉾は庭の入口に立てる。短い念仏の後和讃がと唱えられる。和讃は種類が多く、亡くなった人の年齢・性別によって唱える和讃が異なる。十歳までは「児童和讃」二十歳までは「七七日」成人男子は「帰命頂礼」成人女子は「そもそ

も都」六十歳以上は「箱根」という具合である。和讃の後も短く念仏が入り「しかしか」の口上なる。それが終わると次の家に行く。

供養踊りは校庭に傘鉦を立てバンバ踊りから始める。バンバ踊りは「バンバ踊りの始まるころは じいもばあも出てこい 孫子つれて」からはじまるが「関の五本松 一本きりゃ四本 あとは切られぬ ほんに夫婦松」というような小唄の口説きである。他に「サンサトウザイ」これは鈴木主水の一部である。「まかせ」にも鈴木主水の一部が入る。「左衛門」「ヤレーダ」「蹴出し」「いがしょ」とあるが那須与一・白井権八の語句が入る。

なお寺で唱える和讃「守屋」は善光寺に関係するので内容である。(6. 並柳の項参照)

塚原の寺は真宗本願寺派の元勝寺と法光寺である。(写真7)

## 6) 湯布院町並柳

並柳は湯布院市街地に近い住宅地である。並柳公民館で行う寄せ踊りで8月13日に行く。傘鉦は一体型で竹棹の上に蛇の目傘を差し白い幔幕を巡らす。竹ひごを柳のように垂らし切紙の飾りを付ける。中に南無阿弥陀仏と書いた提灯二個を下げ、赤・黄・緑・青・桃色の布を垂らす。布は3メートルほどで長い。

公民館の中に祭壇が設けられ、それに向かって庭入りがある。まず念仏がある。図1にあるように唱えの高低を表す記号が書いてあるが、引声系の朗々たる唱えである。その後和讃が唱えられるが塚原同様亡くなった人の年齢性別によって和讃が異なる。それが終わるとツケと言って再び念仏がある。その後櫓で口説きがあるが音頭取りの傘はださない。

踊りはバンバ踊りから始まる。体を左右に振って手拍子をとる簡単なものだが、手踊りにはならない、足で拍子をとる。口説きは歌い手によって変わるが、元歌は「三太口説き」

「左衛門」「那須与一」などである。(写真8)

並柳では8月10日に寺の施餓鬼に行く。その時唱える和讃が「森屋の大臣」で善光寺のことであるので関連で掲げる。

「これより唐(ソラ)の天竺の 下界長者の  
御建立 遠仏陀権の 弥陀如来

森屋の大臣 悪事して 池に阿弥陀を 沈めたり  
其の後本田の 善光が

池より阿弥陀を 守り上げ 昼は義光 守り申す  
夜は阿弥陀が 守りつつ

二夜三日と たつうちに 最早信濃に 着きにけり」

## 7) 「庭入り」の構成

以上の調査と参考文献により庭入りの構成を次のように見ることができる。庭入りは傘鉦(分離型のところでは傘鉦と花籠)を先頭に太鼓・鉦・笛で初盆の家を囲まわりと称して供養して回る。まず「念仏申し」として念仏を唱え、次に和讃を唱えた。現在念仏を唱えるのは深見地区の福貴原や湯布院町の並柳で湯布院町荒木でも「養老和讃」の前後に念仏を唱える。また参考資料によると別府市天間や安心院の佐田でも「念仏申し」を行ったとある。他の地区では念仏は消えてしまい和讃から始まる場所が多い。念仏は福貴野や並柳の譜にあるように「南無阿弥陀仏」を長く引き伸ばす引声という唱え方であったろうと考えられる。福貴野では「長念仏」の語がある。この念仏は唱えが難しく短く唱えるようになり、最後は唱えなくなってしまう。後述するように多くの大念仏と言われる民間念仏はこの長く引き伸ばす念仏を大念仏と言っている。五来重はこれらの大念仏のもとと融通念仏であろうとする<sup>4)</sup>。

念仏が消えて和讃が主になっている所が多い。和讃は湯布院町にみるように亡くなった人の年齢別・性別によって異なった。多くの所で唱えられる「花和讃」は「蕾の花の散るを見てもしや我が子もあのごとし」の語句が





や（斉藤）、団扇で拍子をとる。（下余）体を左右にゆする程度の静かな踊りである。口説きの踊りは手をかざす手踊りが入り、動きも早い。このように踊りが異なり、バンバ踊りまでは供養の踊りとされている。前ごみの踊りは、16世紀から17世紀の各種「洛中洛外図屏風」に見られる初期の風流踊りに似ており、太鼓を持つ、団扇を持つなどしている輪踊りが描かれている。バンバ踊りも初期の風流踊りに通じるものと考えられる。口説きと口説きの踊りは後述するように18世紀ころからの盆踊りで、発生からすると風流踊りに遅れる。この二つの踊りを口説きに合わせて踊り、全体をバンバ踊りとするところもあり、混同されている。

以上庭入りは「念仏申し」「和讃」「しかしか」「バンバ踊り」「口説きの踊り」に分けられる。「念仏申し」「バンバ踊り」の部分古態と思われる。

## 2、大分県佐伯市（旧米水津村）

### 1) 宮野浦

大分県佐伯市米水津地区は2005年まで米水津村としてあり米水津湾沿いの漁業集落である。湾は豊後水道につながり瀬戸内海・太平洋を望む。ブリ・イワシ・カツオ他湾内や近海の漁が主であった。

米水津の宮野浦では盆の8月15日の供養踊りの時に傘ボコを出す。これを傘を出すという。供養踊りはトムライ踊りともいう。かつては傘を出す供養盆踊りは4年に一度であり、さらにうるう年は避けたという。平成23年から毎年行うようになった。

漁協前の公民館広場中央に音頭棚という櫓を設け、正面にその年に亡くなった人の祭壇を設け位牌と遺影を祀る。8時ころから初盆の家から傘を持って来て、その家の祭壇の前に立て、傘の下に奠座を敷き近親者が集まり、祭壇への焼香に来た人の接待をしな

がら、盆踊りを楽しむ。傘ボコの傘の部分を死者の着物で覆い、兵児帯やしごきで止めてしぼる。持ち棹には家紋の入った盆提灯を下がっている。傘は番傘が主であったが現在こもり傘を使用している。

祭壇の前で盆踊りが11時頃まで踊られる。佐伯市の海岸一帯の盆踊り口説き盆踊りである。一曲一曲が大変長く、物語になっている。各地区では音頭集を出している。宮野浦は昭和57年版のものがある。載っているのは以下のような口説きである。

「小五郎口説」「おしよ亀井の音頭」「おため半蔵」「志賀団七」「おすみ左衛門」「天神祇」「白滝」「目連尊者」「鶴姫口説」「主水白糸」「小藤口説」「庄一口説」「牡丹長者」「奈須野与一」「川崎主水」「お梅善次郎」「三太口説」「念仏音頭」「切音頭」「地蔵和讃」

「小五郎口説」は炭焼き小五郎譚、「おしよ亀井の音頭」はお塩亀井の心中譚、「おため半蔵」はお為と半蔵という六十六部の物語、「志賀団七」は奥州白石噺の仇討ち譚、「主水白糸」は鈴木主水譚・「三太口説」は「大和三太」ともいわれ駒引きの三太が恋慕のあまり亡くなった玉代姫を蘇生するという物語で人気の話である。

というようにそれぞれの物語が音頭に合せて語られていく。現在一晩も踊ることはないのでさわりの部分だけ音頭取りによって歌われる。この佐伯市では地元の話である「炭焼き小五郎」・「お為半蔵」が広く歌われている。「三太口説き」は宇佐地方にもあった。白石噺はここから宮崎県にかけて「バンバ踊り」として踊られている。

2015年の調査の時は「おしよ亀井」であった。

宮野浦では音頭取りは4人ほどいてかわるがわる櫓に立ち声を競う。太鼓の音頭だけで歌う。音頭取りの傘はない。昔は踊る人が仮装したり、ヒョットコのお面をつけて踊っていた。女の人は編み笠を深くかぶり顔がわか

らないようにして踊った。

11時頃になると盆踊りの最後に「切り音頭」が歌われ、提灯が点灯し、遺族が歌にあわせて櫓の回りを右回りに三周し帰途に就く。傘には亡くなった人の魂がついていて、落ちてしまわないように傘を傾けてはいけなとされた。家に戻り帯を解き着物をはずし、傘は屋根の上にあげた。12時を過ぎると精霊流しがあり、精霊舟に載せて流す家もあった。

「切り音頭」は「きりましょやそこの若い衆酒がなくても踊られる」「咲いた桜になぜ駒つなぐ駒が勇めば花が散る」「御盆きたならお里に帰る先祖供養の踊りする」「南無阿弥陀仏の六字の文字は是は仏の供養となる」「三度回れば口説きは終わる是で先祖の供養となる」などである。(写真9・10)

## 2) 色利

色利では15日宮野浦と同じく集落センターの庭に櫓を立て、正面に盆棚の祭壇を並べる。かつて傘を出す供養盆踊りは4年に一回であり、さらにうるう年は避けたというのは宮野浦と同じである。祭壇の前に傘が立てられている。宮野浦と異なり持ち竿に衣服や帯などの遺品をむすびつけ、傘に覆うということはない。傘には何十本もの線香を垂らす。傘骨の一本一本に紙のこよりを張りつけ線香を垂らす。傘の前には莫塵ではなく椅子が設けられている。親戚近隣の人が次々と焼香に来る。

8時ころから盆踊りが行われる。盆踊りの間、傘は閉じている。盆踊りは口説きで「小五郎口説」「おため半蔵」「米水津色利口説き」などである。2015年の調査のときは「小五郎口説き」であった。

11時ころ盆踊りが終わりに近づくと傘が開かれ吊るされた線香一本一本に火がつけられる。音頭が「切り音頭」になると傘を持つ喪主を先頭に位牌・遺影を持って最初は

ゆっくりと輪を描き、だんだん早く、音頭の囃子に囃されて傘を激しくゆらして新亡を送っていく。

切り音頭は「これできりましょか これできりましょな えんやこらさっさ」「今年や万作穂に穂がさいた」「咲いた桜になぜ駒つなぐ駒が勇めば花が散る」「色利良いとこだ南を受けて浦にゃ蜜柑の小金色」「千秋万歳思うこと叶うた末は鶴亀五葉松」のようにめでたい歌詞が続く。(写真11)

## 3、佐伯市<sup>かまえ</sup>蒲江と延岡市島野浦・熊野江

前号の紀要では遠賀川・玄海灘の音頭取りの傘を書いた。今回は宇佐地区の傘鉾の院内町・安心院町を取り上げた。大分県北部は笠鉾地区と重なるが、音頭取りの傘は豊後高田市・杵築市・日出町にもあり傘鉾の分布より広い。過去に傘を出していた地区を加えると海岸部を中心にもっと広範囲となる。さらに大分県南部の佐伯市から宮崎県延岡市の北浦地区の海岸部に音頭取りが傘を出すところが多くあった。近年盆踊りも新しくなって旧来の口説きの盆踊りが少なくなり、それに伴い傘を出すところが少なくなった。口説きの盆踊りと傘は結び付いている。特に物語性の強い長編の口説きを行うところに傘を出すところが多い。現在佐伯市から延岡市にかけての3ヶ所が傘を出す。(写真12)

### 1) 佐伯市蒲江

佐伯市蒲江は大分県の最南端の漁港で2005年まで蒲江町であった。

蒲江では8月13日の午前3時ころ盆の精霊が来るとして戸を開けるといふ。14日に墓参りを済ませ、14日15日に寺の前の公民館広場に音頭棚(櫓)を立てて盆踊りをする。15日は7時30分から東光寺(臨済宗)で法要があり、この後行う精霊流しの精霊舟を持って寺に集まる。法要の後僧侶を先頭に蒲江湾の浜

に行き精霊舟を盆灯籠とともに流す。それが終わる8時頃から盆踊りが始まる。

音頭棚の前には祭壇が設けられ、寺の位牌と初盆の人の位牌が祀られている。櫓には笹が一本たてられ盆供養の陀羅尼が書かれている。櫓の下には太鼓が置かれ盆踊りは太鼓の囃しのみで歌われる。音頭取りが櫓に上がり唐傘を差す。声が上に逃げないようにするためという。盆踊りは「まくら」から始まる。「一つ出ましようはばかりながら 何か一節口説いてみましょう」以下云々。

蒲江は口説きの多いところで『蒲江町盆踊口説集』<sup>5)</sup>の蒲江浦の部では24種が乗っている。昭和48年発行のガリ版摺りの『蒲江音頭口説集』<sup>6)</sup>も同様である。

「賽の河原」「目連尊者」「平佐口説」「白滝くどき」「俊徳丸」「奈須の与一」「大和三太」「ぼたん長者」「白石くどき」「保衛くどき」「炭焼き小五郎」「伊勢屋くどき」「山鹿のいろは」「梅治小藤」「佐兵衛くどき」「くらま下り」「おくまくどき」「おこんくどき」「明石さうどう」「佐五兵衛殺」「明石さうどう小菊ごろし」「稲葉小僧」「お梅善治」「旧おため半蔵」「新おため半蔵」

かつて盆の口説きは「賽の河原」「目連尊者」「大和三太」を歌う。踊り手はオカメ・ヒョットコ・四十七士や娘姿などの仮装で踊った。最後の「切り音頭」で終わる。(写真12)

## 2) 延岡市島浦町島野浦

延岡市の北浦地区の離島の島浦島の集落しまのうら島野浦の盆踊りには傘を出す。江戸時代延岡藩の参勤交代の初めの寄港地であった。最初の徳島からの移住者が住んだといわれる。現在約50軒である。

盆踊りは8月14日に初盆供養のため15日は先祖供養のために踊る。島野神社前の広場に櫓を組み盆提灯が飾られている。櫓には葦簀がかけられ、櫓下に太鼓がある。音頭取りは蛇の目傘を差す。声の通りがよくなるとい

う。踊りは8時半頃から始まり、女性は浴衣姿に編み笠をかぶる。現在笠を紐で結んでいるが昔は手拭で顔の半分は見えなかった。昔は仮装で「団七踊り」の衣装を着た。「団七踊り」の口説きは「白石くどき」で志賀団七が仇討ちされる物語である。

『島浦音頭本』には11種の口説きが書かれていて一遍一遍が長文である。「賽の川原」「大和三太」「白井権八」「白滝くどき」「お為半蔵」「八百屋お七」「阿波の鳴門」「牡丹長者」「白石くどき」「信濃屋お信」「お艶くどき」

15日に歌われたのは「賽の川原」「お為半蔵」「白滝くどき」「八百屋お七」「牡丹長者」「白石くどき」で音頭取りによってさわりの部分を歌う。櫓にはその都度演目の札が掛けられる。演目は蒲江と共通したものが多い。(写真13)

## 3) 延岡市熊野江

熊野江は延岡市北浦地区にあり、霊夢によりこの地に熊野神社を勧請したところから熊野江の名がついた。14日のみ熊南公民館ゆうなんで踊る。櫓の傘を立て五色の細紙を垂らす。太鼓は櫓の左右で叩くが、熊野音頭の時は木にぶら下げた別の太鼓(小さい)を叩く。

盆踊りは最初に「新バンバ」を踊る。「白石口説」の仇討ちを振りをつけ踊りにしたものであるが、延岡市街ではそれをさらに変えて民謡の「新バンバ」としている。

その後口説きがいくつかは入り最後に熊野節(熊野音頭)を踊る。口説きは「賽の川原」「一の谷」「丹波与作」「炭焼き小五郎」「稲葉小僧」「志賀団七」「留吉くどき」などがある。現在音頭取りがないのでテープで流している。(写真14)

## 4、バンバ踊りと時衆

延岡市では盆踊りというとバンバ踊りが主になっている。バンバ踊りは中央に櫓を立て



口説きで踊ることを差すが、組踊と言って三人が組になって演技をしながら踊るというもので「団七踊り」「唐傘踊り」「四十七士」などがある。特に「団七踊り」は歌舞伎の「奥州白石噺」を題材にした「白石口説き」とか「志賀団七」の口説きで踊る。踊りの中で刀を持って仇討ちを演ずるというもので、衣装もそれなりの仇討ち姿になって行い、その華麗さを競うようになっている。近年では民謡化された「新バンバ」というのもでき、盛んである。問題はこれをなぜバンバ踊りというかで、諸説あるが宇佐地方のバンバ踊りを引き合いに考えてみよう。

長年バンバ踊りを研究している渡邊博史氏は「バンバ」の語源について全国のバンバ踊りを提示しながら、紹介している<sup>7)</sup>。延岡での通説は城の馬場で踊られたからという説、播州の兵庫節からきているので播州のバンを入れてバンバとしたという説である。前者はあまり納得されていない。兵庫節（兵庫口説き）からきたという説は渡邊氏によると、この踊りが愛媛県大洲市の青島踊りに似ている、青島の住人は兵庫県赤穂市坂越のからきている、したがって踊りは兵庫からきたという説である。瀬戸内海を中心として広がる口説き節が18世紀に流行った大阪の盆踊り歌「兵庫口説」を起点としているのは確かである。「兵庫口説き」は兵庫で始まったものが大阪で流行ったとされる<sup>8)</sup>。その中に延岡市熊野江に伝わるような「熊野節」もある。しかし播州をバンバというのは語句的には少し無理と考えられる。

次の説は番場時衆すなわち時衆一向派が関与しているという説で松岡実氏の「庭入りとバンバ踊り一時衆聖の関与について」に詳しい<sup>9)</sup>。宇佐神宮から北西一里ほどの所に豊前善光寺がある。天徳2年（958）空也の開基を伝える古刹である。始め天台宗であったが、寺伝によれば永和2年（1376）から寛文6年（1666）まで時衆寺院であり以降は浄土

宗になって現在に至っている。約3世紀の間記録の少ないこともあり、時衆の活動がはっきりしないが宇佐地域には時衆であることを示す阿号の板碑が多くある<sup>10)</sup>。また安心院町に21ヶ寺、引内町に13ヶ寺の真宗寺院があり、道場として開基された寺が多い<sup>11)</sup>。時衆からの転宗と考えられている。宇佐市四日市町には大谷派の東別院・本願寺派の西別院がある。東別院は永禄5年（1562）に専養庵として開かれ、天正13年（1585）真勝寺として寺号を変え、延享元年（1744）には九州御坊として寺格をあげて全九州の大谷派寺院を統括した。このようにこの地区は時衆からの転宗が考えられる寺院が多く、宇佐の北部一帯は浄土教系寺院多い念仏の風土であったといえよう。庭入りのような大規模な盆行事が発達したのもこのような要因による。

宇佐地域でいうバンバ踊りは前述したように風流踊りである。番場時衆の祖一向上人が大隅八幡社で踊り念仏を始めたのは、文永11年（1274）で一遍上人が信州小田切の里で踊ったのは弘安2年（1279）である。風流踊りの所見は京都伏見の盆風流で応永26年（1420）である。

踊り念仏から念仏踊りへの転化を考えるには、その間年数が開き過ぎている。また踊念仏は儀礼化し僧侶の修行や勸進行為の一環として行われていたこともあり、踊り念仏と輪踊りである風流系念仏踊りは系統を別であろう。風流系念仏踊りは大念仏の唱えの後の風流踊りを踊っているケースが多く、宇佐地域の庭入りも基本的には「念仏+踊り」という構成をとっていたと思われる。とはいえ元治元年（1864）の延岡藩記録『萬覚書』に「番場踊」と記されている<sup>12)</sup>ことから、一概に一向衆すなわち番場時衆の関与を否定するものではない。あとから番場踊りという名がつけられたとも考えられる。豊前善光寺と番場時衆の関係もさることながら庭入りとの直接の影響は不明である。これからの新史料を待

ちたい。

## 5、傘鉾と音頭取りの傘

宇佐地域では傘鉾と音頭取りの傘の両方が出る。米水津では傘鉾がでて吊り下げ物がある。蒲江から延岡にかけては音頭取りの傘が出る。遠賀川流域・玄海灘沿岸では音頭取りの傘がでて遠賀川の上流部では傘鉾もある。他地域で伊勢志摩の大念仏・高知県宿毛市沖の島の傘鉾と同様の盆行事がある。

音頭取りの傘については兵庫口説きの流行に関連していることから江戸時代中期以降といえよう。傘鉾の成立はそれより古い。安心院町の福貴野のように傘鉾の傘を庭入りのあとに使用する例もあり、傘鉾との連続性も考えられる。風流傘はさらに古く、風流踊りの際歌い手が傘に入ってしまう例もあり、風流傘からの移行も考えられる。

延岡藩内藤家の充真院繁子を書いた『五十三次ねむり合いの手』という道中記に「ばんぱ踊り」の図がある。文久3年(1863)9月1日の記事で三本の棒を組み太鼓と鉦を吊るし音頭取りはその下で白を伏せて白の上に乗る傘を差して歌っている。廻りにはいろいろな仮装で踊る姿が描かれている<sup>13)</sup>。バンパ踊りの江戸期の絵としては唯一のもので、棒に太鼓を吊るす例は熊野江にある。白

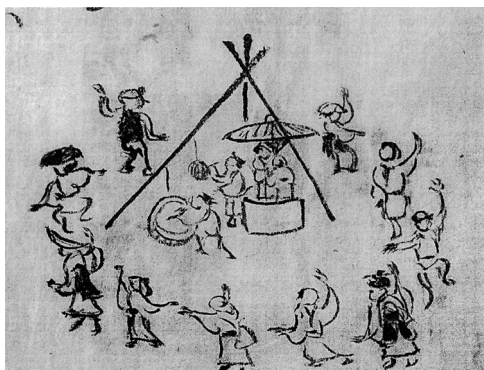


図2 『五十三次ねむり合いの手』のバンパ踊り

を伏せる例は鳥取県や淡路島の口説きに見られ興味深い。

傘鉾については傘が依り代であり、そこに吊り下げ物を下げて送っていくのが原義であろうと考えられる。傘に身に付けているものを下げたり、小袖の布切きりを下げたりする例は古く「洛中洛外図屏風」や「祇園祭礼図」に見られる。植木行宣氏によるとこれを「小袖風流」といい着物を傘に覆うとか吊り下げるのは、着ていた人の厄疫を傘につけて祓い送る行為であるとしている<sup>14)</sup>。米水津の例がそれで傘鉾に付いた霊を囃しながら送っていく。三重県志摩の大念仏や高知県宿毛市沖の島の傘ブクも同様で海の道の伝播が考えられる<sup>15)</sup>。

傘鉾はもともと風流から発生したものであり傘は依り代、鉾は祓いの意味があるとされる。米水津では靈魂を憑けて送るとか流す感が強い。宇佐地域では花籠の柳を長く伸ばすとか提灯を多くつけて飾り立てる。このように風流化・見せ物化がはかられ、賑やかに送るという行事になり、大規模化が進んだと考えられる。

### 注

- 1) 段上達夫「盆の傘鉾—大分の庭入り—」『別府大学大学院紀要』No.18 別府大学2016  
事例は以下の箇所  
佐田・斎藤・塚原・並柳・荒木・荘・天間・南畑・上河内・水車・下余・余上
- 2) 大分県教育庁管理部文化課『安心院の庭入り』1971 佐田・天間  
大分県教育庁管理部文化課「天間の庭入り」『大分の民俗芸能』1991 天間  
院内町誌刊行会「盆の行事」『院内町誌』1973 大門  
別府大学民俗研究会『安心院町深見地区民俗調査報告書』1975 深見地区  
松岡実「盆の庭入りとバンパ踊り」『佛教と民俗』No.9大正大学仏教民俗研究会 1992

- 天間 尾立 大田口 竹の口 平ヶ倉 佐田
- 3) 折口信夫「髭籠の話」「だいがくの研究」『古代研究 民俗学篇第一』1929 大岡山書店→『全集 2』中央公論社1965
  - 4) 五来重「融通念仏・大念仏・六斎念仏」『大谷大学研究年報』1957大谷学会
  - 5) 蒲江町教育委員会『蒲江町盆踊り口説集』2003 段上達夫編纂
  - 6) 倉田隆延『蒲江音頭口説集』1973 私家版 序文 白田甚五郎
  - 7) 渡邊博史「ばんば踊りについて」『延岡の郷土芸能』2013延岡郷土芸能保存会  
「延岡ばんば踊りに関する一考察」『九州保健福祉大学博物館学年報』No.2九州保健福祉大学学芸員養成課程 2013
  - 8) 村上省吾編『兵庫口説』1999弓立社
  - 9) 松岡実 前掲
  - 10) 豊前善光寺『豊前善光寺史』2009
  - 11) 『安心院町誌』安心院町誌編纂委員会 1960
  - 12) 渡邊博史 前掲
  - 13) 『内藤家文書増補・追加目録8 延岡藩主婦人充真院繁子道中日記』2004明治大学博物館
  - 14) 植木行宣「小袖の風流」『芸能史研究』No.141 芸能史研究会1998  
「笠鉦とその流れ」『京都民俗』No.35京都民俗学会 2017  
坂本要「傘ブクと吊り下げ物の民俗」『福島の民俗』No.45福島民俗学会 2017
  - 15) 坂本要「伊勢志摩大念仏の構成と傘ブク」『年報月曜ゼミナール』No.5 月曜ゼミナール2013  
段上達夫「盆の傘鉦1- 依り代としての傘-」『別府大学紀要』No.54 別府大学2013

#### 参考資料

抑々天竺<sup>ツツ</sup>龍鷲山浄飯王ノ御皇子ニ 釈迦牟尼佛ト申ス御佛アリ  
其ノ御弟子ニ目連尊者ト申ス僧アリ  
目連尊者ノ御母ゴ心賢鈍邪見ニオワシマシタマイテ釈迦ノ言議ヲ被ラテ  
餓鬼道ニ落チテ苦シミタマウ

ソレヲ御子目連ハアハレ不便ト御思召シタマヒテ  
御師匠釈迦牟尼佛ニ打チ向ヒ  
我ガ母如何ナル訳ニテ候ヘバ餓鬼道ノ苦シミヲ見  
タモウヤト尋ネ候ヘバ  
御師匠答テ宣ク我ガ母愛着心ノハカナサ其ノ故ニ  
餓鬼道ノ苦シミヲ見タモウト教ヘ候ヘバ  
目連大ニ悲シミタマヒ如何トモシテ母ノ苦限免レ  
ルベキスベモヤ候ハント  
三七ガ其ノ間大グレンノ暗トナシ車軸ノ雨ヲ降ラ  
スレド火炎トナッテ立チ上リ  
更ニ其ノ甲斐見ル能ズ尊者深ク悲シミタマヒ御師  
匠釈迦牟尼佛ノ御下ニヨリ  
モシ御師匠畏レナガラ我ガ母娑婆ニ御座ストキ唯  
愛着ノ念深キニヨリテ餓鬼道ノ苦シミアルト  
カヤ  
如何トモシテ母ノ苦限免ルベキスベモヤ候ハント  
願ヒ上レバ御師匠コタヘテ宣ク  
余ガ一人ノ力ニテ及バンヤ三千世界ノ僧ヲヨセ萬  
僧供養ヲ務メミヨ  
其ノ御経ノ功力ニヨツテ地獄上リセシメタモウト  
教ヘ候ヘバ  
目連大ニ喜ビタマヒ其ノママソコヲ立チ退リ龍鷲  
山ニタチコモリ  
尊者神通ヲモツテ三千世界ノ菩薩方一堂ニ招キヨ  
セ三七日ガ其ノ間  
萬僧供養ヲ致スナリ尊者望ミ見タマエバ経文陀羅  
尼ノ効力ニヨツテ  
地獄上リヲ致シタリ 其ノ時三千世界ノ菩薩方大  
ニ喜ビタマヒ  
頭ニ蓮ヲウナダレテ西ニ扇ヲ指シ揃ヘ其ノ喜シサ  
其ノ餘リ  
衣ノ袖ヲ打チ振リテ バンババンバト躍ラセタモウ  
浮カバセタモウガ七月十二日躍ラセタモウガ七月  
十三日  
其ノ御学ヲ以ツテ今ノ世ニ至ルマデ初盆踊リヲ致  
スナリ  
笛ノ歌口太鼓ノ拍子鐘ノ音ハ無情ノ音ヲヒビクラン  
音頭頭ハ御座アルヤ用意ヨクバ中ニ早々始メ候ヘヤ  
昭和五十六年八月筑陽書



写真1 佐田の傘鉾



写真2 齊藤の庭入り



写真3 齊藤の「しかしか」



写真4 下余の音頭取り



写真5 下余の庭入り



写真6 福貴野の庭入り





写真7 塚原の「しかしか」



写真8 並柳の口説き盆踊り



写真9 宮野浦の傘鉾



写真10 宮野浦の送り



写真11 色利の傘鉾



写真12 蒲江の口説き



